メッセ共斗理論合宿に向けて

明大教研

我々は6月末所において、サークルの自己運動の欠落に起因するところの教育運動の停滞状況、学内の諸組織、諸サークルとの具体的な手を通じた緊密関係を創り出していくことによって打破すべく、一方、教養学、中教審の最終答申が文部省に提出されるという教育情況の中で大新編集部が着実に中教審大学化を狙った学校当局諮問機関・理事会によって編集部の内約を口実にした、編集部処分、予算凍結、ボックスロックアウトといった強权的な攻撃を受けていることに対する我々の反撃体制を打築していくものとして大新手帖に結集していった。しかしながら、この間の大新手帖を踏まえ、とりわけ、7月10日の対話集会因会によって、理事からのほぼ全面的な自己批判書、確約書の獲得という手帖の新たな局面をむかえるに至って、今までの我々のかかわり方が極めて不十分であり、新たな手帖の質が要請されていることが明らかになっているだろう。今後の新聞発行が既に具体的日程によっている現在、我々は早急にそれをなしていかなければならず、ここで再度、大新手帖が提起してきた問題を明らかにし、「サークル」として、「読者」としてその立場を近づけていきたい。

我々は69年4月合宿以降、「安保」に代表される相対一民主教育政治の研究会運動としてあった60年代教研運動と訣別すべくサークル再編の作業を開始してきた。68年以降の全共闘運動とリンクし明大闘争委員会と知紘し、闘いに決起していったにもかかわらず、「サークル」という自己の存在基盤からの視点の欠落と、各サークルの個別課題の延長線上にではなく、短絡的に政治を語っていったそのラディカル性に敬意を抱いていたということを踏まえるならば、その教研再編の融のひとつに「サークル論」を設定していかなければならなかった。特に、全共闘が60年代の総括を告げるという意味において、「サークル論」を初発の作業はそれと深く関る60年代サークル運動の総括という大きな視野に立った内容でなければならないだろう。

大学における「サークル」の存在は、「教室」における「学問」・「研究」の不十分性を補完すべく、専門性を求める問題意識所有者の自然発生的結合形態として、より明確に言えば立学どおり「教室」からの逃げ場として形成されてきた。しかしながら、いったんサークルが形成され、自己運動を展開するや否や新たに「人間関係、自己形成の場」化として美化され、「サークル」の存在しない大学生活は考えられないという程に「サークル」の有益性が主張されてきた。そこでは、サークルが教室の課外形態として存在していることなどは全く無視されている。一方、大学当局も大学教育の矛盾を隠ぺいせんがために「学生による自主的な教育、研究の場」「学生イコイの場」として これを認め、主重重下に、場所的、金銭的保障をしてきたのである。

したがって、そのサークルの活動の内実も、大学教育の不備を補う「研究」会運動としてあった。とりわけ、戦後民主々義がオウ歌した60年代前半は、社会の「平和と民主々義」「民族的、民主々義的文化運動」の影響下に大きく包摂され、いちように「より良き」学生生活のために、ホアル的なサークル運動へと合流していった。そして60年代後半に至るとようやくいきすぎのサークル運動の批判として、サークルを「運動体」として位置づけ政治に目をむけていった。しかしながらそれも「赤色サークル論」として単なるサークルの「サロンル」へのアンチテーゼの意味しか持つことができず、その原理的把握の欠落性でもって、対权力との関係で敗北を重ねるたびに消もウしていったのである。我々はこのようないきすぎのサークル運動の不毛性を克服する環を、近代学問、研究体系総体に対する色彩、解体へと突き進んだ全日的視座における全共闘運動の渦の中にみていった、即ちその中で一般的に語られてきた「加害性」と「自己否定性」という論理を「サークル」とエリキく情況の中で問いつめてゆくならば、それは極めて根底的な問題を提起していたのであった。その第一点は前に述べてきたように、サークルは学問幻想共同体から自然発生的に疑似共同体として登場し、その内容は近代学問、教育のサークル主体への疑似奪還でしかなかった。そうであるならばサークル運動の必然性は、自己を存立せしめる世界への問い、すなわち学問解放へむけた運動の中にしかあり得ない。それは同時に存在性そのものの変革を除ぺイし大学幻想を拡大再生産している自己リサークルをも解体の対象としてとらえ返すことが必要とされていたのである。

オ2点めとして我々は、このように学問解放・近代学問、教育研究体系解体・サークル解体という方向性を確立してきたわけであるが、それを保障するものとして、次にサークルの団結形態を問題としていった。それは「サークルとサークル相成員個々の関わり方」「サークルの個別課題とサークル相成員個々の関わり方」と密接につながり合っているわけであるが、60年代サークル運動のそれは、「問題意識共有体として、自己の生き方と深くかかわらない所で自己の問題意識あるいは趣味そのばす場所として存在していった。その結果、サークル運動は学生時代だけの単なる学生生活に花をそえる程度の意味内容しかもち得なかった。それに対して我々は昨年以降、「教育と自己」「教研と自己」とのかかわりを「自己の生き方」「教育に対する自己の認識過程」「問題を媒介として徹底的に対決を行い、一定程度の「問題意識共有体」からのひずくを勝ち取ってきた。それは、「教育」という具体的問題に自己をあくまでも下降させ、他の問題に接する時、それを抜きにしては語り得ないところの代替不能なこれの基盤として教育を真に所有していくということであり、「サークルをそのような代替不能の教育を所有する人間関係の『共同体』へと、更にいうならば、その教育の内容をも共有する「イデオロギー的共同体」へとサークルの団結形態を止揚していかなければならないだろう。

以上、簡単であるけれども我々のサークル再編の方向性を明らかにしてきたへもうひとつの融である「教育論」再構築の内容は紙面も変えて述べていきたい。

我々は今后も、70年代の闘うサークル運動の創出へ向けた不可欠のものとして、この作業の更有る現化をはかっていきたいと考える。

次にこの様なサークルMの方向性を踏まえて、我々のマッセ共斗に結集して行く場合の立場の明確化と今後の方向性について述べていきたい。昨年以来斗い抜かれて来た大新斗争の意義を我々なりに捉え返して見るならばまず第一に大新編集部が明確に大学当局の御用新聞化を拒否し新聞学会解体まで志向した斗いである事、第二に今までの紙面上の「活字」のみを媒介としていた「主体と客体」の関係性の止揚、第三にヌルジョア的交通形態を否定した我々の斗うべき人メディアVの創出、として大きくまとめられるだろう。とりわけ第一点目の問題は我々のサークル存在と深くかかわりあったものとしてあるだろう。すなわちサークルと新聞学会（編集部）の存在相違、活動は全く違うにもかかわらず、その内に含む論理は我々が既に明らかにしてきたごとく、我々の眼から大学を再生産していくものに他ならず、大学教育、学内管理体制を裏から支えているものに他ならない。したがって、大新斗争もそのような存在性を認識するにしたがって、その斗争の質も処分撤回、理事会解体から新聞学会（編集部）解体へと発展していかねばならない。第二の問題は、第一において述べた編集者としての自己の否定とは、次に新たな編集主体を準備していかねばならず、それを主体と客体の関係の中に見ていかねばならないだろう。いままでの両者の関係は、一方において活字を媒介にして結合しているにもかかわらず、又その活字が両者の決定的な分断の要素として存在し、そ

の枠を一歩も乗り越えることが出来なかった。主体へ書き手）は、その治安表現のみを自己のよりどころとし、自己をとりまく情況に対する関わり方も、全く表面的に単なる取材の対象でしかなかった。又客体者へ読み手）としての我々も、新聞をりわけ朝日新聞に対しては、それを大学の御用新聞として最初から規定し、我々の変革対象から切り離してしまっていた。その両者の関係は斗争次元においても、表現者と斗争者とに分断されていたのである。大新斗争は、このような両者の関係を止揚するものとして新たな論理をMUC共斗として物質化してきた。このMUC共斗の持つ意味は、以上で明らかなように、主体と客体の統一の場として、すなわち、表現者は自己を斗争者へと斗争者は表現者をも自己へ課していく場としてある。しかしながら、この両者の矛盾を止揚する媒介となるのは、なおきで具体的な斗争を通じたものでなければならず、我々は一般的な主体と客体の統一を追求するのではなく、MQ的な立場に立ったものでなければならないだろう。オミに我々は、我々のヘヨウメディアンを通じた、対权力との斗争を展開しなければならず、今日の帝国主義权力の階級支配が、日常的地域的に形成されてきた人民の精神社会に依拠したものであり、权力はそれをブルジョア的な交通形態を従横に駆使することによって、その支配を貫徹してきた。それは明大新聞が公正中立なる幻想性でもって、大学当局の学内管理、秩序化のイデオロギー的機能を果たしていたことをみれば一層明らかであろう。これに対して、我々の側はこのような幻想をもたぬばかりかヘメディアレに対して全く無知であり、それが長い間、大新編集部に孤独な斗いを強いていたという現実であった。十・10国交によって今後の新聞発行が一定程度の物質的な保障を獲ち取ってはっきり我々は、編集部の提起して来た权力と資本に従属しないヨウメディアをどのような内容でもって、誰に向けて発していくか、現在的な我々の大きな社会としてあるどろう。以上三点にわたって大新斗争の本質的な意味を考えて来たわけであるが、人間の意識の物質化が言語であり、その言語が既KMQ性を有するものであるならば我々は自らの言語、メディアを持ち、权力に向けた我々の戦線の一翼を担うものとして明確K位置付けていかねばならない。

〈MEMO〉